

論壇時評

筒井清忠



2月号

今日は各誌とも激突するソ連・東欧情勢についての論考を多く載せているが、何か物足りない感じが否めない。月刊誌の宿命として一月月単位の締め切りに拘束されるため、ルーミア革命の事実や分析がどこにも登場しないのである。

いなのに対し、ルーミアやブルガリアはギリシア正教が主なので「静かにしている」ものの、ギリシア正教というのはあまり抵抗精神がないらしい」と言っている(渡部・豊野綾子新春放談「たまたものでは無い『日本』正論」。

渡部は、国際政治

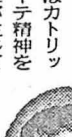
物足りぬ東欧分析

従って、各論考がどうして
もやや「古い」という印象を
与えている。それどころか氣
の毒なことに、見通しの誤り
を露呈させたものも散見され
る始末である。

例えば渡部昇一は、ハンガ
リーやポーランドはカトリッ
クで、ドン・キホーテ精神を
持っているのが変革が生じて

うか。舩添は言つ、「東ヨ
ロッパを見る場合、西欧型の
民主主義や市民社会を経験し
たか否かが、その後のコース

舩添 要一氏

A black and white portrait of Mitsuharu Tsutsui, a middle-aged man with dark hair, wearing a suit and tie, looking slightly to the left.

舛添 要一氏



河合 隼雄氏



五百旗頭真氏

新思想の確立を強調

「時代との格闘」説く橋爪氏

めようとして右の二人の文章を引いたのではない。新しい情勢に即応した分析、解説といふのであれば今日、月刊誌はテレビ、新聞に勝るわけはないのだから、もっとタイマルクスのような優れた思

どめることができない」。これに対し、ルーマニア、ブルガリアはその経験がないため強固な支配体制に抵抗したいのである。思想的深み、ム・スパンが長く、深い思想家は、時代の現実と激しく格闘する中から自らの思想をはぐくんだのだが、日本では戦後に限ってもそのような

への憧憬（どうけい）が後退したかに見える現代日本の知的情景の中では、これは無理な注文なのだろうか。

この点、多くの共感をもつて読んだのは橋爪大三郎「マルクス主義の瓦礫を越えて」（正論）だった。橋爪は表裏に反し、マルクスが当時の知的水準の中ではいかに卓越していたかを指摘し、翻って今日これだけの経済大国でありながら、そして文化、教育の

な思想は一つもない。「外国公論」は「層精細に」この点を
ではやったものがそのまま日
本でもはやる、というこの
繰り返し。見る所から見れば、
五百旗頭真「日本の意思決定

「『流』以下の仕事である」と全部を「流」以下に分類する。ポスト・モダン思想も流行がさめてみると、「かつてのマルクス主義とは比較にもならない、内容のなさ」「この世界を考える足しになりそうなのは、ついに在庫切れとなった状態である。しかし、それだからこそ、これからが思想の時代なのだ」

こう言って橋爪は「輸入新号」はその一つの具体的成果と言えよ。

河合らは、欧米を唯一至高の神を中心とした「中心統合型」社会と規定し、日本を無為の中心を取り巻くパワーバランスを特徴に持つ「中空均衡」型社会であるとすると、アマトラスとスサノラの間においてバランスを取り続けるツギ

見ると「どこで何が決まっているのかさっぱり分からない」ということになるのである。

オルフレンらとの間には重要な違いもある。

オルフレンらは、欧米型の中心統合型の意思決定システムの方が優れているという明確な価値判断を持っているのに対して、河合らは欧米型のイエス・ノ型決定原理は分かりやすいとしても、その決定が「正しい」という保障を込んでいるという。

さらに、一部リゾート地における土地買いあさり、米国におけるM&A（企業の合併・買収）の典型としてのLBO（買収予定の企業を担保に買収資金の融資を受け、買収後はその企業を分別売却する）の行き過ぎが米議会、政

のは何か。これに期待される
ところである。

ところで橋爪は、一過性の
時事解説を新思想・輸入菜
から脱却して新しい思想を確
立するための橋頭堡（きょうとうぼ）(きょうとうぼう)と云う。
日本には、責任を持つて意
思決定のできる権力中核が存
在しない」という議論と符号
するところなのである。

（とうほ）として、現代日本文明の思想的解明を挙げているが、矢野暢「パラダイム」としての『日本』の成立」（中央

中空均衡型の行政機構で、意思決定は必ず分散化し、国家は極めて分権の性格の強いものとなる。それは外から

最後に資本主義の二つの本が占めるようになった。極めて上の現代日本文明を考へる上で欠かせない「マネ」について、「世界が『ジヤパン・モンスター・マネ』という特集を組んでいる」と金銭関係者の一説と新しく

ので触れておきたい。特に印象の確立を望みたい。
(京大助教授・社会学)

橋爪 大三郎

年初に動筆書房から論文集『現代思想はいま何を考えればよいのか』が出ます。そのあと、別々の出版社で、日本の制度改革をめぐる論文集、社会科学入門の教科書を書く約束になっています。

懸案の仕事がたまっているの、今年には細かな注文を整理して、書き下ろしに取り組むのが念願です。

[illegible]

世界は言語で

できている、のか

橋爪大三郎

「……世界は、言語で、出来ているのだよ、……」
こんなことを話した友人の口許を、私は、ややあつけにとられて見つめていた。

その頃の私は、まだ二十歳そこそこ。友人のA氏は私よりほんの数歳しか年長でなくせに、土方異みtainな年齢不詳の風貌である。

——世界は言語で出来ている、のだろうか？

友人は自信ありげに、窓から外を見渡している。そこは七階建てマンションの最上階で、低層のモルタル住宅や町工場のつづく街並みを一望することができる。彼は軽く手をひろげ、ほら、みんな言語じゃないか、というようなそぶりを示した。

夜の闇は去ったが、灰色の雲が低くたれこめている。徹夜明けの頭が、理解のおよばない突然の思考回路に、軋むような音を立てた。

——世界は本当に、言語で出来ているのだろうか。この琺瑯のコーヒークップも？ このガストロップも？ このアルミサッシの窓枠も？ そして、その向こうの街並みも？ ……

いろいろな事物をさし示すのが、言語ではないかと思っていた。存在するのは事物である。言語はその外側から、事物に意味やなにかをつけ加えるだけだと、そう思っていた。それは違うのだろうか。事物は言語なしでは存在できない、ということなのか。

そこでこの世界から、言語を試しに消去してみる。コーヒークップも、ガストロップも窓枠も、……眼前のものはみな、名前を奪われた。ただそこにある。

つぎに、私からも言語を消去してみる。すると、観念や思考の明瞭な輪郭が失なわれてゆき、名状しがたい意識の流れが残った。

これでおしまいだろうか。いや、まだある。加工品などは、その存在すらも脅かされるかもしれない。思考の明瞭な輪郭を持たない人間が、琺瑯のカップや窓枠を作るなんて、考えられないからだ。そこでコーヒークップやガストロップが、視界のなかでぐにやぐにやに溶けていった。人間も、ひとつ子一人いなくなったようだ。あたりはムンクの描いた「叫び」という絵みたいに、自然現象の混沌とした渦巻きになっていた。

それと同時に、ぐらぐらした乳歯のように、マルクス主義の残骸も抜け落ちていき、あとにうっすらと血のにじんだ味がした。

ヴァイトゲンシュタインの、『哲学探究』。この思索の迷路のなかでは、言語と行為、言語と身体、言語と他者……が、いつももつれあったまま現れた。そして、そこから言語をとり除くと、すべてが、まるで糸の切れたネックレスみたいに、ばらばらになってしまうのだった。だから彼は、この事態のことを、言語ゲームとよんだのである。

これは、世界のかなりよい記述かもしれない。われわれは言語を通じて、あらゆることがらを経験し、社会を営んでいるのだから。でも彼は、そこまでしかのべなかった。その先を、もう少しはつきり、積極的に語ることはできないか。

それには、言語と独立に働く作用を見つけるとよい。おそらくそれは、性。そして、権力であろう。性と権力が、言語とどのように組み合わさって、われわれ人間のふるまいや社会を構成しているのか。フーコーとはまた違ったやり方で、それを明らかにするのが、社会学をやっている私の、当面の仕事のなかみである。

こうして、むかしの謎は、ぐらぐらの乳歯のように抜け去っていった。あとからは、もつとがっしりした謎が生えてきた。

（はしづめ・だいさぶろう 社会学）

これでおしまいか。もしもこれが、言語のない世界というものなら、でもそれはまだ、確かにあるではないか。なぜ、世界は言語でできている、なんて言えるのだろうか。わからない。謎だ……。

私は、あなたの言うことは理解できない、といういみのことを友人にのべた。彼は、何か説明しかけたみたいにな、ちよつと間をおき、それから遠くをみつめてこう言った。

「……キミも、そのうちにわかると思うよ。きっと、そのうち……」

*

そのうちに、わかる……？ 私をその日とらえた謎は、頭を悩ませて街を歩きまわるたびに、私のなかで少しずつ大きくなり、かつ微妙にかたちを変えていった。

そのうちにわかる、のだろうか？ わかるのかどうかなんて、わからなかった。もしかしたら、わかるとはせいぜい、謎がかたちを変えて、とうとう自分の生存の一部になってしまう、というだけのことではないか。癌が自然治癒するみたいに。解くことはできないが、さりとて投げ出すわけにもいかない、謎。たしかにそれから、何度か謎はかたちを変えたようである。

構造主義を読みかじった夏。字引片手に、頁を繰りながら、ああ……と、背中から風が吹き抜けるのを感じた。

「じゃないか体」だつて いいじゃないか



橋爪大三郎

初刷からどんと二万五千部。そのあと五千部、一万部と増刷を重ねていくなんて、新書の世界は信じられない。何しろわれわれの出す本と云えば、初版が一千五百部そこそこで、三年以内に五百部増刷ならビールで乾杯、とみっちりいのだ。

その新書を書いてみませんか、と言われて面喰らった。誰にむかつて、どんなふうに書けばいいのか。雲をつかむようである。

しかもテーマは、構造主義だという。冗談でしょう。ポスト構造主義に、くそ味噌に言われたあと、このこそんな本出してごらん。間抜けぶりを天下に晒すようなものだ。だいいち、いまさらわかり切った話ばかりで、誰も興味を持たないよ。と反対したけれど、編集者も喰いさがる。結局引き受けてしまったのが、三年前の話。

引き受けた以上は、それなりの仕事にしたい。

構造主義をただ紹介するのでは、能がないので、いくつか柱を決めた。まず構造主義と、数学との結びつきにスポットを当てる。ポスト構造主義とは、つかず離れずで行こう。そしてとにかく、わかりやすく書くこと。

「わかりやすく」は、前から私のモットーだった。世の中の本の、なんと解りにくいことよ。そのわりにたいい内容がない。そんなのは、金輪際ごめんだ。だから①まず、論理にこだわる。論理を追いやすように、②単文を原則とし、複雑な構文をなくす。もちろん、③むやみにむずかしい言葉を使わない。言ってみれば、ベージック・イングリッシュの日本語版みたいなものだ。これを「平明体」という。

専門家相手の論文なら、大体これで読んでもらえる。けれど新書では、まだだめみたいだ。なにしろ、「構造主義」なんて聞いたこともない、という人のほうが多いらしい。

たまたまその頃、非常勤で、記号論の講義を担当していた。その学生さん達が、ものを知ってるのやら知らないのやら、とんでもない質問をしてくる。こりゃ面白い。それになかなかシビアで、興味がなくとすぐ居眠りしたりサボったり。ちょうどいい、彼（女）らを読者に想定してやれ。連中のニヤリとする顔が浮かんでくれば、しめたものだ。

私のなかにだつて、彼（女）らはい。構造主義を聞きかじりの大学生の頃。やんちゃ盛りりの中学・高校生の頃。いろんな年代の私全員集合、ガヤガヤ相談してみると、だんだん言いたいことが肉声になってきた。そうだ、同じことを言うのでも、話し言葉でないとだめなんだ！

こうして文体（友人の命名によると、「じゃないか体」という）が決まってみると、書くのが楽しくなってくる。筆が進んでしょうがない。調子にのって、あんまりくだけすぎたらダメ、と編集者に釘をさされたくらい。

実例がわかりやすい。畏れ多いが、丸山真男さんの文章を例にさせてもらう。

A…《戦国時代を通じて形成された近世封建社会の、中世封建社会に対する重要な特質は、鉄砲の渡来による戦術の変化・秀吉の検地及刀狩等の過程を経て兵農分離が決定的となり、武士が土地との直接的関連を喪失し、城下町に集中して領主の下に階層的な家臣団を形成したことにある》（『日本政治思想史研究』東京大学出版会、九頁。原文旧字旧仮名）

内容的にはすぐれた叙述だが、何十年も前のものだけあって難解だ。そこで、これを平明体に直してみる。

B…《戦国時代を経るうちに、近世封建社会が形成された。この社会は、中世の封建社会と異なる重要な特徴がある。すなわち、鉄砲が渡来して戦術が変化したうえに、秀吉が検地や刀狩をすすめた結果、兵農分離が決定的となったのである。武士は土地との結びつきを失って、城下町に集中し、領主のもとに階

級的な家臣団を形成した。》
さらに、「じゃないか体」にくだと、こうなる。

C…《同じ封建社会といっても、中世と近世じゃえらい違いだ。戦国時代に、鉄砲が入ってきた。そのため、戦争のやり方ががらりと変わってしまった。おまけに秀吉の、検地や刀狩もあったりして、武士は仕方なく、もと居た土地を離れ、城下町に集まってくる。そしてだんだん、領主をトップにした、ピラミッドみたいな組織（家臣団）をこしらえた。これがいわゆる、兵農分離。》

Aだとまるきし頭に入らなくても、Cならわかるという人がいる（かなり多い）のではないかな。それなら、こういう文体の新書もあっていいはずだ。

こうして楽しく、『はじめの構造主義』を書かせてもらったわけだが、この仕事をしたことでは私は変わったろうか。

変わったと言えは変わった。新しい文体のおかげで、いろんな読者に、いろんな題材で書けるようになった。歌謡曲に転向したソプラノ歌手みたい、出番も増えた。

しかし、社会学をやる私の本質が、変わったわけじゃない。

A↓B↓Cは、要は加工度の違いである。発想するときには、誰でも実は、かなりAに近い言葉で考えている。何を考えるかが、やはり勝負。難文には、発想に負担をかけないという利点もある。だから機会があれば、ウルトラ難文体にだって、挑戦してみてもいいと思っている。

（はしづめ・だいさぶろう 東京工業大学助教授・社会学）



「じゃないか体」だっていいじゃないか——橋爪大三郎

一九四八年神奈川県生まれ。東京大学文学部社会学科卒業。構造主義を専攻した（言語）派社会学者の樹立を目指して執筆を続けていた。現在、東京工業大学助教授。著書に「言語ゲームと社会理論」「仏教の言説戦略」「はじめの構造主義」他がある。

初刷からほとんど二万五千部。そのあと五千部、一万部と増刷を重ねていくなんて、新書の世界は信じられない。何しろわれわれの出す本とさえ、初版が一千五百部そこそこ、三年以内に五百部増刷ならビールで乾杯、とみっちりいのだ。

その新書を書いてみませんか、と言われて面喰らった。誰にむかって、どんなふうに書けばいいのか。雲をつかむようである。

しかもテーマは、構造主義だという。冗談でしょう。ポスト構造主義に、くそ味噌に言われたあと、のこのこそんな本出してごらん。間抜けぶりを天下に晒すようなものだ。だいいち、いまさらわかり切った話ばかりで、誰も興味を持たないよ。と反対したけれど、編集者も喰いさがる。結局引き受けてしまったのが、三年前の話。

——引き受けた以上は、それなりの仕事にしたい。

構造主義をただ紹介するのでは、能がないので、いくつか柱を決めた。まず構造主義と、数学との結びつきにスポットを当てる。ポスト構造主義とは、つかず離れずで行こう。そしてとにかく、わかりやすく書くこと。

「わかりやすく」は、前から私のモットーだった。世の中の本の、なんと解りにくいことよ。そのわりにたいいてい内容がない。そんなのは、金輪際ごめん。だから①まず、論理にこだわる。論理を追いやすいように、②短文を原則とし、複雑な構文をなくす。もちろん、③むやみにむずかしい言葉を使わない。言ってみれば、ベシック・イングリッシュの日本語版みたいなものだ。これを「平明体」という。

専門家相手の論文なら、大体これで読んでもらえらる。けれど新書では、まだだめみたいだ。なにしろ、「構造主義」なんて聞いたこともない、という人のほうが多いらしい。

たまたまその頃、非常勤で、記号論の講義を担当していた。その学生さん達が、ものを知ってるのやら知らないのやら、とんでもない質問をしてくる。こりや面白い。それになかなかシビアで、興味がないとすぐ居眠りしたりサボったり。ちょうどいい、彼（女）らを読者に想定してやれ。連中のニヤリとする顔が浮かんでくれば、しめたものだ。

私のなかにあって、彼（女）らはいらる。構造主義を聞きかじりの大学生の頃。やんちゃ盛りりの中学・高校生の頃。いろんな年代の私が全員集合、ガヤガヤ相談してみると、だんだ

「クロニクル講談社現代新書」（1990年6月）非売品 pp. 14-19

GS 14

15 「じゃないか体」だっていいじゃないか

ん言いたいことが肉声になってきた。そうだ、話し言葉でないとだめなんだ！

こうして文体（友人の命名によると、「じゃないか体」という）が決まってみると、書くのが楽しくなってくる。筆が進んでしまうが、調子にのって、あんまりくだけすぎたらダメ、と編集者に釘をさされたくらい。

実例がわかりやすい。畏れ多いが、丸山真男さんの文章を例にさせてもらおう。

A…《戦国時代を通じて形成された近世封建社会の、中世封建社会に対する特質は、鉄砲の渡来による戦術の変化・秀吉の検地及刀狩等の過程を経て兵農分離が決定的となり、武士が土地との直接的関連を喪失し、城下町に集中して領主の下に階級的な家臣団を形成したことにある。》（『日本政治思想史研究』東京大学出版会、九頁。原文旧字旧仮名）

内容的にはすぐれた叙述だが、とにかく難解だ。そこで、これを平明体に直してみる。B…《戦国時代を経るうちに、近世封建社会が形成された。この社会は、中世の封建社会と異なる重要な特徴がある。すなわち、鉄砲が渡来して戦術が変化したうえに、秀吉が検地や刀狩をすすめた結果、兵農分離が決定的となったのである。武士は土地との結びつきを失って、城下町に集中し、領主のもとに階級的な家臣団を形成した。》さらに、「じゃないか体」にくだと、こうなる。

C…《同じ封建社会といっても、中世と近世じゃえらい違いだ。

戦国時代に、鉄砲が入ってきた。そのため、戦争のやり方ががらりと変わってしまった。おまけに秀吉の、検地や刀狩もあったりして、武士は仕方なく、もと居た土地を離れ、城下町に集まってくる。そしてだんだん、領主をトップにした、ピラミッドみたいな組織（家臣団）をこしらえた。これがいわゆる、兵農分離。》Aだとまるきり頭に入らなくても、Cならわかるという人がいる（かなり多い）のではな

いかな。それなら、こういう文体の新書もあっていいはずだ。こうして楽しく、「はじめの構造主義」を書かせてもらったわけだが、この仕事をしたことで私は変わったろうか。

変わったと言えは変わった。新しい文体のおかげで、いろんな読者に、いろんな題材で書けるようになった。歌謡曲に転向したソプラノ歌手みたいに、出番も増えた。

しかし、社会学をやる私の本質が、変わったわけじゃない。A→B→Cは、要は加工度の違いである。発想するときは、誰でも実は、かなりAに近い言葉で考えている。何を考えるかが、やはり勝負。難文体には、発想に負担をかけないという利点もある。だから機会があれば、ウルトラ難文体にだって、挑戦してみてもいい

17 「じゃないか体」だっていいじゃないか

GS 16

1990-12
5/9

『はじめての構造主義』——一九八八年五月（日刊）
主体が消える

神話学はレヴィ・ストロースの専売特許みたいなものだが、構造主義者たちにとっても、看板板になっている。なぜかというと、神話学の成功が、これまでの近代主義の思想（人間を主体とみる考え方）に打撃を与えるからだ。神話を理解するのに、主体なんか関係ない。——とまで言い切ってしまうのは問題だが、とにかくレヴィ・ストロースが、いわゆる「主体不関与」の文体を創始したことになっている。

というところ、なにやらむずかしく聞こえるが、実はたいしたことではない。

遠近法の話を出してみよう。遠近法は、ひとりひとりの視点（主体）から見た世界を、忠実に表現しようという方法だった。そこでは、主体とか、客観とか、認識とかいうことが、十分意味をもっている。

ところが、遠近法をヒントに、射影幾何学が登場する。ここでは、視点は一定せず、あちこち動きまわる。視点（主体）の差異が無視されることで、対象の「構造」が浮かびあがる仕掛けになっている。「構造」は、ひとりの主体（視点）が自分にとだわって、世界を「認識」しようとしているあいだは、現れてこないもの

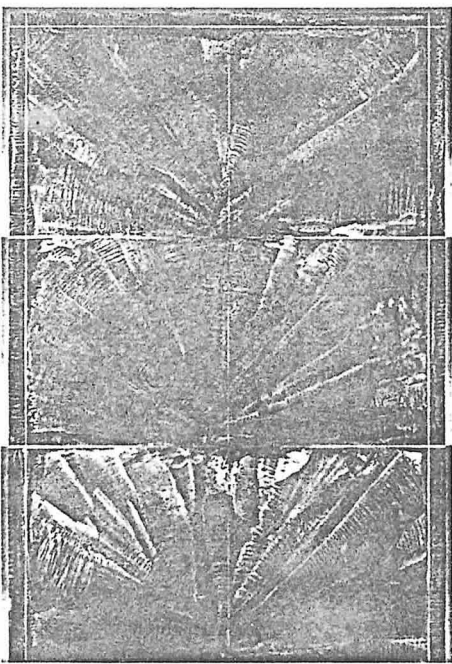
なのだ。（中略）

この射影幾何学の体系化をきっかけにして、数学における構造主義が誕生した。こうなふに「構造」を研究するのは、そもそも、主体とか客観とか、なにか実体を考へてしまう発想とは対極的である。レヴィ・ストロースは、代数学の「構造」の話しかしなかったみたいだけれども、幾何学の「構造」にも話を広げてみれば、構造主義の方法のなかで主体が消えていく理由が、よくわかる。

レヴィ・ストロースは、主体の思考（ひとりひとりが責任をもつ、理性的で自覚的な思考）の手の届かない彼方に、それを包む、神話的な思考（大勢の人びとをとりえる無自覚な思考）の領域が存在することを示した。それが神話である。神話は、一定の秩序——個々の神話の間の変換関係にもなる「構造」——をもっている。この「構造」は、主体の思考によって直接とらえられないもの、「不可視」のものなのだ。

*

というわけで、レヴィ・ストロースについても構造主義についても、話したいことはみんな話してしまった。だからいとおう、おしまい。



創刊
一〇〇〇点
刊行記念

クロニクル

講談社現代新書



著者特別エッセイ「現代新書と私」

「付解説目録——一九九〇年六月現在



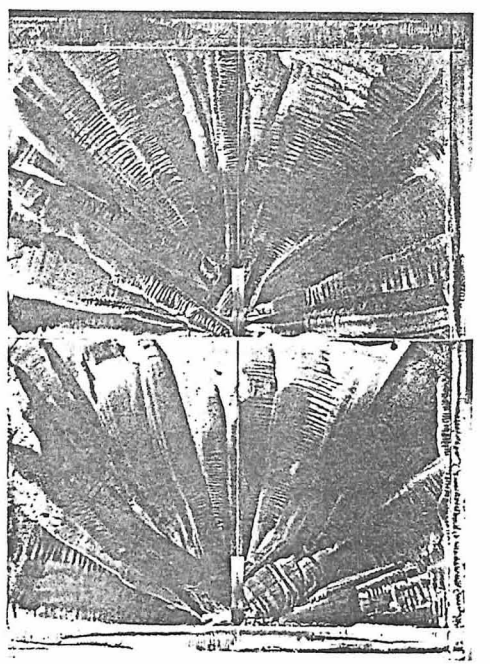
クロニクル講談社現代新書



「付解説目録
一九九〇年六月現在

非売品

- 弓削達「ニクソンとゴルバチョフの間」橋爪大三郎「じやないか体だつていいじやないか」笠原嘉「東と東
- 丸山圭三郎「羅漢さんが揃った」中谷雄「ドロッツアウト以後」桜井哲夫「ことは失った若者たち
- 加藤秀俊「大入大」立花隆「情報整理法」中野孝次「思いがけず」秋山さと子「現代新書と私
- 渡辺吉「身近になったハンブル」紀野一義「般若心経を読む」飯田経夫「豊かさ三部作」の背景
- 渡部昇一「現代新書と私」都留重介「実社会と経済学」坂坂元「良き編集者との出会い
- 会田雄次「現代新書執筆のころ」小此木啓吾「フロイトと社会思想
- 中根千枝「夕テ社会の人間関係」田崎清忠「ヤングレディからヤングヒールへ



画 加納光於

講談社



橋爪大三郎

思ってもなかった中東戦争危機で、自衛隊海外派遣の「国際平和協力法」を審議することになった。国民の過半数は反対で、自民党からも疑問の声が上がっている。それなのに、何となく手をこまねいてはいられない。はたして思わぬことになる。

国際法を重んずる平和を求める。一たび戦争を回避した日本国憲法。この二原則を堅持し、その後の歴史を世界に「平和憲法」として残す。これが、自民党から疑問の声が上がっている。それなのに、何となく手をこまねいてはいられない。はたして思わぬことになる。

「平和憲法」を重んずる。一たび戦争を回避した日本国憲法。この二原則を堅持し、その後の歴史を世界に「平和憲法」として残す。これが、自民党から疑問の声が上がっている。それなのに、何となく手をこまねいてはいられない。はたして思わぬことになる。

憲法見直し含む平和構想を

協力法は公然の違反 求められる国民の自覚

橋爪大三郎

その後日本は、アメリカの意向に自衛隊を置き、現実を最大限に考慮し、自衛隊を必要とする状況に必要に応じて派遣する。これは、自衛隊が国際平和協力を果たすための唯一の方法である。この憲法は、平和と武力を両立させるための唯一の方法である。この憲法は、平和と武力を両立させるための唯一の方法である。

その後日本は、アメリカの意向に自衛隊を置き、現実を最大限に考慮し、自衛隊を必要とする状況に必要に応じて派遣する。これは、自衛隊が国際平和協力を果たすための唯一の方法である。この憲法は、平和と武力を両立させるための唯一の方法である。この憲法は、平和と武力を両立させるための唯一の方法である。

その後日本は、アメリカの意向に自衛隊を置き、現実を最大限に考慮し、自衛隊を必要とする状況に必要に応じて派遣する。これは、自衛隊が国際平和協力を果たすための唯一の方法である。この憲法は、平和と武力を両立させるための唯一の方法である。この憲法は、平和と武力を両立させるための唯一の方法である。

安倍元幹事長が、かつての自衛隊の山内裕雄院長は、本誌の取材に秘書を通じて、「最近の(安倍氏の)病状については報

ない。安倍氏は高級官僚の前でも見境なく『疲れた』を連発している。強いクスリを服用しているため、昼の二時、三時ごろ

ガンに隠そうとする側近と取材するマスコミが情報戦を繰り広げた。玉置長官は現職大臣のま

と位置づけられている。ポスト冷戦下では、ブッシュ大統領の戦略にビッタリは

をぶつける。最初から手打ちの線はできているから、アメリカからの「難題」を装うて

「眠くなるようだ」
が、安倍氏周辺は健康不安をこう打ち消す。
退院後、急に活動しすぎたため、疲労がたまっているだけ。本日に重病なら五月にハワイで六ラウンドのゴルフを三日もやれるはずがない。腹の余な脂肪がとれてかえってすっきりしている。

安倍元幹事長が、かつての自衛隊の山内裕雄院長は、本誌の取材に秘書を通じて、「最近の(安倍氏の)病状については報

ない。安倍氏は高級官僚の前でも見境なく『疲れた』を連発している。強いクスリを服用しているため、昼の二時、三時ごろ

と位置づけられている。ポスト冷戦下では、ブッシュ大統領の戦略にビッタリは

をぶつける。最初から手打ちの線はできているから、アメリカからの「難題」を装うて

「眠くなるようだ」
が、安倍氏周辺は健康不安をこう打ち消す。
退院後、急に活動しすぎたため、疲労がたまっているだけ。本日に重病なら五月にハワイで六ラウンドのゴルフを三日もやれるはずがない。腹の余な脂肪がとれてかえってすっきりしている。

安倍元幹事長が、かつての自衛隊の山内裕雄院長は、本誌の取材に秘書を通じて、「最近の(安倍氏の)病状については報

ない。安倍氏は高級官僚の前でも見境なく『疲れた』を連発している。強いクスリを服用しているため、昼の二時、三時ごろ

と位置づけられている。ポスト冷戦下では、ブッシュ大統領の戦略にビッタリは

をぶつける。最初から手打ちの線はできているから、アメリカからの「難題」を装うて

「眠くなるようだ」
が、安倍氏周辺は健康不安をこう打ち消す。
退院後、急に活動しすぎたため、疲労がたまっているだけ。本日に重病なら五月にハワイで六ラウンドのゴルフを三日もやれるはずがない。腹の余な脂肪がとれてかえってすっきりしている。

安倍元幹事長が、かつての自衛隊の山内裕雄院長は、本誌の取材に秘書を通じて、「最近の(安倍氏の)病状については報

ない。安倍氏は高級官僚の前でも見境なく『疲れた』を連発している。強いクスリを服用しているため、昼の二時、三時ごろ

と位置づけられている。ポスト冷戦下では、ブッシュ大統領の戦略にビッタリは

をぶつける。最初から手打ちの線はできているから、アメリカからの「難題」を装うて

「眠くなるようだ」
が、安倍氏周辺は健康不安をこう打ち消す。
退院後、急に活動しすぎたため、疲労がたまっているだけ。本日に重病なら五月にハワイで六ラウンドのゴルフを三日もやれるはずがない。腹の余な脂肪がとれてかえってすっきりしている。

安倍元幹事長が、かつての自衛隊の山内裕雄院長は、本誌の取材に秘書を通じて、「最近の(安倍氏の)病状については報

ない。安倍氏は高級官僚の前でも見境なく『疲れた』を連発している。強いクスリを服用しているため、昼の二時、三時ごろ

と位置づけられている。ポスト冷戦下では、ブッシュ大統領の戦略にビッタリは

をぶつける。最初から手打ちの線はできているから、アメリカからの「難題」を装うて

「眠くなるようだ」
が、安倍氏周辺は健康不安をこう打ち消す。
退院後、急に活動しすぎたため、疲労がたまっているだけ。本日に重病なら五月にハワイで六ラウンドのゴルフを三日もやれるはずがない。腹の余な脂肪がとれてかえってすっきりしている。

安倍元幹事長が、かつての自衛隊の山内裕雄院長は、本誌の取材に秘書を通じて、「最近の(安倍氏の)病状については報

ない。安倍氏は高級官僚の前でも見境なく『疲れた』を連発している。強いクスリを服用しているため、昼の二時、三時ごろ

と位置づけられている。ポスト冷戦下では、ブッシュ大統領の戦略にビッタリは

をぶつける。最初から手打ちの線はできているから、アメリカからの「難題」を装うて

アメリカが望む弱体内閣

東大助教授 橋爪大三郎

トランプでナポレオンゲームをやることを思い浮かべてみよう。どういふわけか、海部首相がナポレオンになった。

ゲームでは多数の反対派がよってたかって少数派のナポレオン側を引きずり降ろそうとする。そこで、ナポレオンは政治的イシューを決め、副官といわれる協力者を作ることと地位を堅持しようとするのが基本的なルール。

二大政党を望む?

ポスト冷戦下では、ブッシュ大統領の戦略にビッタリはまってくるのが海部首相だ。ブッシュは海部をじっと観察していた。総選挙直後のブッシュからの電話は、従来の派閥理論による自民党の政策決定メカニズムを変えるため、ナポレオンの海部にあっては、独自の「アメリカカード」を発揮できるから好都合だった。

一方で、アメリカをナポレオンにたとえれば、世界戦略上、日本は非常に有能な副官と位置づけられている。ポスト

かわるから多国籍軍にコミットすべきではないのだ。日本が経済的に成功したのは、戦争の一方に負担しないという知恵ではなかったのか。

国際社会への見せかけだけが先走る
橋爪大三郎（東工大助教授・社会学）

自衛隊の存在と日本国憲法は

エスカレートする「武器携行」

「国連」「平和」「協力」「非軍事」「後方支援」……国連平和協力法の要綱案にちりばめられているソフトイメージの単語を拾うと、一瞬、白馬にまたがった「平和の騎士」がアラブの難民を救出に出かけるかのような錯覚に陥る。だが、実態は北大西洋条約機構（NATO）定議で米ソに続く世界第三位の軍事大国ニッポンが、小火器などで武装した自衛隊を戦後にはじめて海外の戦場へ送り出すことになる。日米安保のワケからも逸脱し、安全保障上の大きな政策

今の日本の一般市民が武力を備えて制服を着た軍人になったらどの程度、賢明にふるまえるだろうか。軍隊を持つというカルチャーが日本人には熟していないし、主要国のように蜂起した市民軍が国家を樹立した経験もない。軍隊の性質、その恐ろしさ、コントロールするためには何をすればいいかわからない。実際に兵器を扱い、それが人の生命を奪うという実感をわ

し、前線と後方との境界がなくなったとき、自衛隊が戦闘に巻き込まれる可能性は大きい。防衛庁が自衛隊員の身分を「併任」や「派遣」という形にこだわったのは、緊急時の指揮系統を事実上、防衛庁長官に一本化する目的のほかに、自衛隊法の「武器携行」「武器使用」の適用を受けるためだと指摘する専門家もいる。自衛隊法第八七条には「自衛隊は、その任務の遂行に必要な武器を保有することができる」とあり、第九五条には、自衛官は武器等の保護の

「中東貢献」が「海外派兵」に変わるまで

渡辺美智雄自民党元政調会長 各国がイラク制裁のため直接行動しているのに、石油に最も依存している日本だけただ乗りし、何もしないというのは通らない。イラク軍撤退のため、掃海艇の派遣など目に見える形の協力を行うべきだ（8・16 海部首相への進言）

大内啓伍民社党委員長 交戦を伴わないものについては自衛隊も含めて支援活動する方向で考えていくべきだ。停戦後に国連平和監視団が組織されれば、自衛隊が参加することについては集団的自衛権の行使にはならない（8・19 記者会見で）



栗山尚一外務事務次官 国連を中心として国際的努力が行われている時、日本がカネで何でも済ますというイメージができることは将来にとってよくない。象徴的な形でも、人が出てい

隊そのものだ。

まず、国連軍は国連憲章四二条に基づくもので、安保理常任理事国の五大国の参謀総長からなる軍事参謀委員会が集団指導で指揮をとり、軍事的制裁を行う。だが、五大国の利害が一致することはないため、これまで

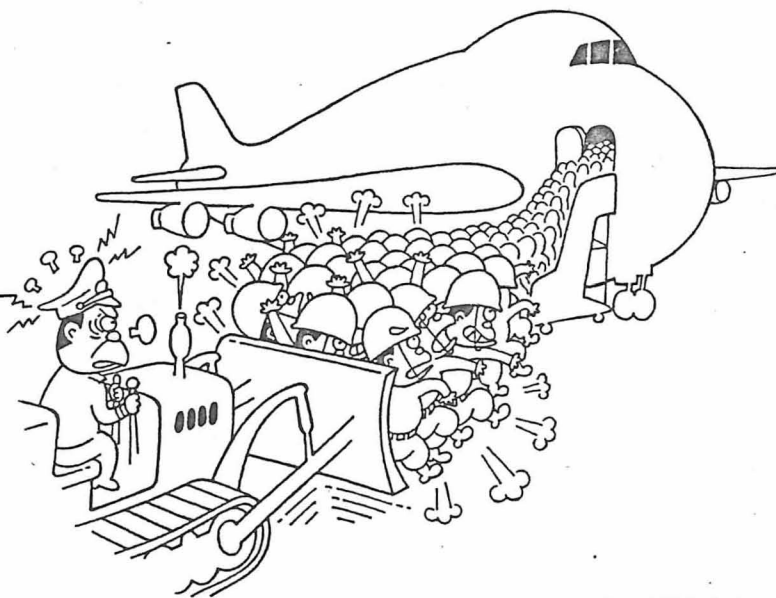
海外派兵に関する国会議事録その一

●一九五四年四月一六日 衆院内閣・外務連合審査で改進黨の並木芳雄氏が「集団的自衛権に基づいての派兵は憲法違反ではないのか」と質問。

佐藤達夫内閣法制局長官 「実力行使のできるのは自衛権の限界内しかできない。したがって、よその国にまで出て行って実力行使することは厳格な自衛権の意味においては限界外だ。憲法第九條二項において交戦権もないから、自衛隊がよそにお手伝いに出てもお役に立ちますよ」

●五四年六月二日 参院本会議で「自衛隊の海外出動を為さざることに決する決議」

「本院は、自衛隊の創設に際



え・草原タカオ

ための軽火器携行か、あるいは非武装で、紛争当事国かその周囲に入り、紛争を停止させたり、停戦状況の監視などを行う。三番目が、今回サウジアラビアに駐留している米軍などの多国籍軍を示す。国連はあくまでも経済制裁を実効あらしめるための手段としての武力行使しか

くことが必要ではないか（8・19 NHKテレビの座談会で）
依田智治防衛事務次官 （国際緊急援助隊派遣法の改正問題で、自衛隊が参加することは）意義のあることで、前向きに検討すべきだ。（紛争地域への派遣は）戦後一貫して個別的自衛権の枠内でやってきたので、できることは限られている（8・20 記者会見で）
山崎拓自民党安保調査会長代理（元防衛庁長官） ユニホーム（制服組）の丸腰での派遣を考慮すべきではないか。とりわけ防衛医官派遣は効果があると思う（8・20 海部首相に進言）
山口鶴男社会党書記長 国際緊急援助隊派遣法を改正しての要員派遣は、立法の趣旨などからみて反対だ。自衛隊の派遣も、国連軍が編成された場合も含め認められない。多国籍軍派遣は国連決議の枠を超えたものだ（8・21 党基本見解）
渡辺自民党元政調会長 自衛隊の対潜哨戒機や掃海艇の派遣に必要な自衛隊法を改正すべきだ。病院船の派遣や自衛艦が邦人保護に行くことに、国民は反対しない（8・24 パンコクでの講演で）
金丸信元副総理 軍（自衛隊）を動かすことは憲法上許さ

9/9

と非難されかねないほどである。

めいめいの選択の結果だから仕方ない

橋爪大三郎
東京工業大学助教授
社会学

出生率の低下は、それほど心配すべきことなのか？

政府は出生率の落ち込みを憂慮して、対策を練っている。だがもともと、子どもを生む、生まないは、個々の夫婦の決定にまかされていたはずだ。めいめいの事情に応じた、最適の選択。その総計として、出生率が落ち込むのだとしたら、仕方ないではないか。

出生率が下がると、労働市場の構造が変化し、高齢人口の割合が増えるなど、社会的な影響が深刻だ、と言われている。それなりの対策が必要だ。けれども、人間が少なければ、賃金も上昇し、人手に頼っていた業種の機械化・ロボット化が進むなど、プラス面の変

化もある。それだけの余力が、日本社会にはある。あまり心配しなくても構わない、と私は予測している。

若いカップルが、子どもを生もうと思わない理由には、いろいろある。

子どもが二人いれば、もうたくさん。一人じゃ可哀そうという親より、一人で十分という親も増えてきた。ゼロでいいという親たち(DINKS)も着実に増加中だ。一人目→二人目……と子どもが増えるごとに、満足の増分は減減する。逆に、子どもにかかるコストは、年々膨らんでいる。育児の時間、教育費の上昇、住居が狭

いこと、家計の圧迫。差引き、子どもを生むメリットはすぐ逆ザヤになってしまふ。

家業を継がせる、という理由で子どもをもうけるケースも稀になった。農業も、自営業も、この先の展望がない。家制度が崩れてしまつて、いまさら子どもに老後を頼ろうという親も少なくなった。

女性の高学歴化が急速に進み、職業をもつ女性の割合も増えている。そこで女性は、出産・子育てをまとめて済ませたい、と思いはじめた。当然、出生率は少なめになる。保育設備や休職制度など、企業の対応が遅れて、この傾向に拍車がかかっている。

それに、子ども以外にも、人生を楽しむ選択肢がいろいろ増えた。旅行、カルチャー、スポーツ、仕事。子どもは、そのワン・オブ・ゼムにすぎない。だから、子どもを育てるのを、面倒に思う親たちが確実に増えている。

そういうわけで、子どもを生むことを望まないカップルが多くな

戦中の保育を通して得たものは何か
鈴木とくがつづるこの一冊！

戦中保育私記

昭和十六年から昭和二十二年

鈴木とく 著

四六判 上製本 256頁

定価 1,300円(本体 1,262円)



チャイルド本社

なぜ、子どもを産まないか！？

ダブルインカム・ノークィズ、略してディンクス(DINKS)。夫婦が共働きして、子どもを産まない。すると、収入が夫婦二人、つまり、ダブルインカムとなり、豊かで自由な生活が送れる。アメリカから流入したディンクスが、日本でも猛威をふるうようになってきた。この結果は出生率一・五七となり、日本の人口は急

豊かさを謳歌する ピーターパン・カップルたち

千石 保
日本青少年研究所長
比較社会学

つたのは、当たり前だ。もつとも、うっかり妊娠してしまうこともある。だが、望まない妊娠に比べれば、望まない出産はずっと数が少ない。ここでも選択がはたらいて、出生の増加が抑えられる仕組みになっている。だからあえて、出生数を増やしたいのであれば、子どもを生みた

いと思わない理由のいくつかを、除去してやること。手近なところでは、まず企業や地域の保育制度の充実だ(特に、長時間保育や休日保育など)。あと、住宅対策(良質で安価な賃貸住宅を大量に供給すること)に、まっさきに手をつけるべきだろう。

速に減少し、やがては国民のない国になっていきそうである。国民のない国はありえないから、日本自体が沈没してしまう。

ディンクスの波は、さしあたり、産婦人科の営業成績に影響を及ぼし、幼稚園・保育所の存立を危うくしだした。どうして、若いカップルは子どもを産まないのか。若い女性たち

の主張を聞いてみると、生活が大変だから、と言う。彼女たちが口をそろえている不産の理由は、経済問題だというのである。

この主張は理由があり、また理由がない、と思われる。昔のことを考えると、豊かな今日とは比較にならないほど貧しかった。それなのに、四人や五人の子どもを産むのが普通だった。

不産の理由は経済というのは、理由にならない。だがしかし、今日の豊かさを前提にして考えると、子どもを産むことによって、生活レベルの大幅ダウンを免がれない。現状の豊かさを当然の前提として考えると、不産の理由は経済になる。

現状の豊かさを前提として考えるのは、政策レベルでは肯定せねばならないから、「経済不産説」は若いカップルのホンネとして受け取らねばならないだろう。

もう一つ、経済のほかに考えられることは、ノーマリゲーション、つまりは、子育て義務のわずらわしさからの解放である。

子どもを育てるのは大変だから、という答えは、彼らのもう一つのホンネだろう。子育て期間中は、好きなテニスもゴルフも禁止されるし、映画やレストランへの外出も制限される。夜泣きの子どもの世話もせねばならない。

自由を制限されることは、子どもの成長を楽しみにするライフスタイルと天秤にかけて、割に合わないと考えるわけだ。

若いカップルは明らかに、ピーターパン・カップルとなっている。いつまでも、義務のないピーターパンのような子どものままでいたいのである。

こう考えてくると、もつと子どもを産むよう奨励することは、はなはだ困難と言わねばならない。もし、経済的理由なら経済政策によつて多産の奨励をすることができ